The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	劇作家J. M. シング研究 : 生存条件と解放志向との間の緊張と調和
Author(s)	枡田, 良一
Citation	大阪大学, 1980, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/841
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏名・(本籍)	桝田良一（ます だ りょう いち）
学位の種類	文学博士
学位記番号	第 5099 号
学位授与の日付	昭和55年10月28日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**劇作家J.M.シング研究** **—生存条件と解放志向との間の緊張と調和—**
論文審査委員	(主査)教授 山川 鴻三 (副査)教授 片山 良展　助教授 藤井 治彦

論文内容の要旨

本論文は，筆者の研究の基本的立場を示す「序論」と「シングの演劇観考察」(第Ⅰ章)，シングの六編の戯曲の考察(第Ⅱ章—第Ⅶ章)，そして主として諸家のシング観の批判から成る「結び」の九章で構成されており，参考文献表を含めて総頁863頁(四百字詰原稿用紙) に及ぶ大部なものである。以下順を追って各章の要旨を述べる。

序論

生存条件からの解放志向。人間の生命が有限であるが故に，人間は普遍性，永遠性をあこがれる。人間はさまざまな生存条件によって限定されているが故に，これを越えようとする志向をもつ。筆者はこのような「生存条件」(現実) とそれからの「解放志向」(願望) との間の緊張と調和を芸術と人生における根幹的事実として認める。

行動の形象化。　人間の生存条件としての変化の相を端的に示すのは人間の行動であるが，演劇は仕草と台詞によって人間の行動を形象化する。これを人間の行動から区別して劇の行動と呼ぶ筆者は，この劇の行動を人間の内的な志向とその発露としての外的な動きの総和としてとらえる必要を説き，演劇の基本条件として動作が主で言葉が従であるというような分断の仕方を排除する。

演劇評価の重層性。　演劇は即興劇と異なり戯曲を必要とする点で，文学と共通する面をもつが，戯曲は読者の眼と耳をもってその行動を視覚化し聴覚化して享受されるという点で，「文学＋アルファ」である。さらに演劇には舞台形象とくに演技の問題が加わるであろう。筆者は演劇評価のもつこのような重層性を踏まえた上で，舞台形象とくに演技の評価が戯曲の台詞のもつ行動性と不可分の関係にある点を指摘し，演劇評価における文学評価の重要性を強調するのである。

Ⅰ　シングの演劇観考察。　シングにはまとまった演劇論はないが,自作に付した序文,『覚え書き』および書簡等によって彼の演劇観の大体はうかがうことができる。シングはそれらのものの中で，自己の演劇を「現実と喜び」などいくつかの対立するものの綜合として述べているが，これを「現実と夢との間の緊張」として明確に規定したのは，アラン・プライスである。筆者はこれを更に進めて，シングにおいては，この現実と夢の関係が単にそれぞれ別個に存在する二つのものの関係ではなく，その間に有機的なつながりのある関係であるとし，それを「生存条件」とそれからの「解放志向」という形で説明しようとする。そしてその例証として，シングの重んじたアイルランドの田舎の人々の実際の言葉とそれらの人々の民族的想像力との関係や，シングが芸術の両極と考えた悲劇とユーモアとの関係等を挙げ，これらの関係について詳しく論じている。

Ⅱ　『谷間の蔭』――孤独の認識。　筆者はまず，この劇の主人公ノーラの二面性を指摘する。ノーラは，人間存在の有限性と変化の相に対する現実認識から，夫ダンの死を自己の死に対する恐怖をもって見るばかりでなく，死に一定の意味を与えることにより精神的な安定を得ようとする調和への動きを見せる。又老いに対しても，ノーラは老いたペギイ・カヴァナの姿に自分の未来像を二重写しに見るばかりでなく，溌剌たる生への希求をもつ人間にとって年を取ることは主観的に「おかしなこと」であるとし，両者の間の緊張によって人間存在の調和を保つのであるという。筆者はさらに，人間精神を抑圧する陰うつな自然を生を鼓舞する陽気な自然から区別し，前者の自然が，幕切れのダンとマイケルの飲酒の場に象徴されるように，ほかの人物には内的葛藤や緊張をもたらさないのに反して，ひとり生への希求をもつノーラだけは,「お喋り」によってそれからの解放感を得るのだと説く。このようにして筆者は，ガーステンバーガーの「＜持つ＞人生」と「＜在る＞或いは＜成る＞人生」との対比を,「緊張」と「調和」の論理によって更に精緻に分析して見せるのである。

Ⅲ　『海へ騎りゆく人々』――実在としての死。　この劇でも前作と同様死への不安が人物の行動を支配しているが，前作の死が観念としての死であるのに対して，この劇のそれは実在としての死である。この劇はこのような現実の死に対する主人公モーリャの感情的反応を中心として展開するのである。さて，この劇には，モーリャの夫と舅と６人の息子を奪った海を始めとして，幾多の死を象徴する言葉がある。中でも重要なのは数と色彩を表わす言葉である。筆者はこれらの言葉のもつ象徴的意味を詳細に分析し，これらの象徴に死の要素ばかりでなく，生への願いがこめられている事実を鋭く指摘した上で，モーリャを中心としてこの劇における生対死の葛藤を探るのであるが，従来諸家がモーリャの外的葛藤に眼を向けているのに対して，筆者は彼女の内的葛藤に眼を向ける必要を説き，彼女の心の中における生存条件とそれからの解放志向との間の葛藤を浮き彫りにするのである。

Ⅳ　『聖者の泉』――人間存在の調和志向としての想像力。聖者の泉のご利益で開眼した乞食夫婦マーティンとメアリは，自分たちが若くて美しいと想像していた自分たちの虚像が崩れるのを見いだす。メアリの方は現実への適応力を示すけれども，マーティンは激しい幻滅を感じ，もとの幻想の世界に帰ることを求める(第一幕)。筆者はここで，彼らと聖者とがそれぞれ幻想と神というともに観念の世界に住む人々ではあるが，聖者が事物の表面しか見ていないのに対して，彼らは事物の根本相を見ているとして，彼らの想像力を高く評価する。さて，周囲の人々によって異分子として排除され

たマーティンは，再び盲目になる直前，日常生活との対立に苦しみ，孤立状態に陥る。彼はメアリとともに,「南の町」の未知の世界に豊かな生活を求めて出立する（第二幕，第三幕)。筆者はここで，諸家の説を批判し，諸家が彼らの言動や生活を逃避的なものとして非難するのに対して，彼らが豊かな想像力をもって自由な生を志向し，それと生存条件との間の緊張によって生存の調和を保とうとする点に，彼らの言動と生活の意義を見いだし，これを強く弁護するのである。

Ⅴ　『鋳掛屋の婚礼』――無法と見合う生のエネルギーの限りなき発散。　鋳掛屋の女房セアラは夫マイケルと正式の婚礼を挙げたいと思って，無邪気に牧師に頼む。しかし利害にこだわる牧師は，容易に応ずる気配がない。そこで二人の議論になり，さらにマイケルの母メアリも現われ，議論は彼女らの側に分がありそうに見える（第一幕)。しかし結局，婚礼は挫折する。婚礼の報酬として牧師は金貨十シリングと袋に包んだブリキ罐を要求するが，牧師が開けてみると，袋には空瓶三本しかない。牧師とセアラの再度の対話の後，マイケルも加わり，二人は牧師の口に袋を詰め込み，頭に袋を被せて縛り上げる（第二幕)。こういう騒々しい雰囲気をもつこの劇は，前三作と比べると，人物間の内的葛藤に基づく劇的行為の展開に乏しく，諸家により失敗作として評されている。しかし筆者はこれを，法，秩序，慣習と，このような社会的生存条件を免れて生の限りなき発散を試みる人々との対立を描き，後者の勝利を謳歌する劇として捉え，これを高く評価するのである。

Ⅵ　『西の国の人気者』――想像力と自己形成。　主人公クリスティは村人たちの前で父親殺しを白状する。クリスティは村人たちにもてはやされ，村の娘ペギーンのあこがれの的になる。自由な生の発露を願う彼女に触発されて，クリスティは彼女を自己の生の発露の対象と考える。ところが，クリスティが競技に優勝し,「西の国の人気者」として喝采を浴びている最中に，彼の父親が姿を現わす。そこでクリスティは父親殺しの演技を村人たちの前で繰り返すが，今度は村人たちの反感を買うばかり。ペギーンには見放され，村人たちには縄で縛られる。しかしそれにも屈せず自己の存在を誇示するクリスティは，父親の権威から脱した自立した存在として，父親とともに村を出てゆく。題材の不道徳性の非難に対してその普遍性を主張する筆者は，三幕を通じて絶えず変化し成長するこの主人公の建設的な想像力を高く評価し，この想像力が人間の生存条件からくる孤独の認識と，それからの解放志向との間の緊張関係において，生の発露の過程を経て自己変貌へと働くことを説くのである。

Ⅶ　『悲しみのデアドラ』――若さ，美，愛の定着志向。　この劇の筋は単純明快で，老いたる王コノハと結ばれた溌剌たる少女デアドラが，若者ネイシャと愛の逃避行をするが，結局ネイシャの後を追って自らも命を断つという話である。筆者はまず，この劇のテーマを要約して，生の発露への願望が生存条件との間に緊張を生じ，微妙な均衡を保ちながら結局は破綻をきたすことにあるという。筆者はさらに，この劇の雰囲気，デアドラの台詞，他の登場人物とのかかわりなどを通じてデアドラが死へと向かう過程を精密に分析した後，デアドラの死を正当化して，若さ，美，愛のその全盛時での中断ほど現実的に悲しいことはないが，中断によって若さ，美，愛を観念的に定着し得たという点において，デアドラは悲劇美の体現者として共感を呼び得るものだと結論するのである。

結び。　筆者は以上の議論を次のように要約する。

『谷間の蔭』,『海へ騎りゆく人々』――生存条件が解放志向を圧している。

『鋳掛屋の婚礼』——解放志向の強さが生存条件を圧倒している。

『聖者の泉』——解放志向が客観的には生存条件によって圧倒されているが，主体的には全く屈することを知らない。

『西の国の人気者』——解放志向が生存条件から脱しているかに見えるほど，解放志向への強い傾きが示されている。

『悲しみのデアドラ』——生存条件が決定的なものとして現われ，解放志向は現実的には何の効力も持たないかの如くである。

このようにシングの六編の戯曲に統一的解釈を与えた筆者は，次に諸家の説の検討を試み，その字句の曖昧さを指摘して自説の妥当性を強調するのである。

論文の審査結果の要旨

わが国におけるシング研究の現状は，未だ甚だ不十分な状態で，シングに関する一編の片々たる小冊子と，二，三の概論的なものの中にシングの紹介的な記事があるにすぎない。海外においても，シングを概論の一部として扱ったものは可成の数に上るが，シングを単独に扱った研究書の数はそう多くはない。このようなシング研究の現状において，シングの本格的な研究を目ざしたこのような大部な本論文の意味は大きいといわなければならない。本論文は「生存条件」と「解放志向」ならびにこれに関連するいくつかのキー・ワードを巧みに駆使して，シングの六編の戯曲を解釈したもので，その論理の鋭さと論旨の一貫性には瞠目すべきものがある。筆者はシングに関する文献を細大洩らさず渉猟し，それらを自己の立場から適確に批判する。一々首肯すべき意見であり，中には卓見も少なくない。例えば，諸家が『海へ騎りゆく人々』の主題をモーリャ（生）と海（死）との葛藤にあるとするのに対して，筆者がそれをモーリャその人の中における生存条件と解放志向との葛藤とする意見である。本論文は「生存条件」と「解放志向」という概念を作品評価の規準に用いて成功している場合もある。『鋳掛屋の婚礼』がその好例である。又本論文は時には，例えば象徴のような文学固有の規準によって作品を評価している。『海へ騎りゆく人々』の数や色彩の象徴の解釈がそれで，中でも「赤」の解釈は犀利で説得力がある。

しかし本論文にも問題点がないわけではない。まず，筆者の考察は主として戯曲の内容に関するものであり，台詞のリズム，イメージ，象徴など戯曲の形式に関する考察が少ない恨みがある。上述の『海へ騎りゆく人々』の象徴の解釈のようなものがほかには無かったことが惜しまれる。又文章の運びにやや生硬なところがあり，語句や構文に幾らか晦渋なところがあったのは遺憾である。しかし本論文は所期の目的を完全に達成しているのであり，これらの点はその達成をいささかも妨げるものではない。

以上の観点から本論文は文学博士の学位を授与するに十分適格であることを認定する次第である。